

# 平尾 魯仙（ひらお・ろせん）

## 1、プロフィール

幕末・明治の津軽の画人。しかし、業績は国学・歴史・地誌・民俗など多方面に及ぶ。俳諧は内海草坡についたが作品は少なく、和歌は求められて百余首の草稿を残している。

<生没>

1808(文化5)年 10月 21日 ~ 1880(明治 13)年 2月 21日

<青森との関わり>

弘前に生まれる、地元で多くの先人から育を受け、自己の学問・芸術を多彩に開花させた。

## 2、作家解説

画人。国学者。歴史考証家。随筆家。和歌・俳諧はともに作品数は多くはなく、前者が百余首の草稿を残すのみであり、題材も国学・画業などに触れたものが多い。

名は亮致、通称初三郎(八三郎)、別号蘆川・魯僊・宏斎・雄山など。文化5年10月21日、弘前紺屋町魚商小浜屋に生まれる。父、藤二郎。生来学問を好み、松田駒水に師事、経史を修める。画絵は初め工藤五鳳、ついで毛内雲林に師事した。俳人内海草坡に書法と俳諧を学び、18歳の時同門の鶴谷有節と出郷遊学を図ったが、大鱈で発見され果せなかった。さらに百川学庵、今村慶寿に師事して学問を深めた。天保8年 30歳、家業を弟に譲り画と文筆に専念することになる。安政2年松前にわたり箱館で西洋人を見る。このころから有節・今村真種らと平田派の国学を学び、元治元年平田鉄胤の門に入り、師没後の門人帳に名を遺す。明治9年明治天皇の本県行幸の時、暗門瀑府図などの画の上覧の栄に浴する。13年没する。享年 73。画の弟子が多く、三上仙年、工藤仙乙、山上魯山、山形岳泉らがある。また考古学は佐藤仙之が嗣いだ。民間の話を集めた「谷の響」、

「合浦奇談」「松前紀行」「箱館夷人談」などの見聞録、有神論「幽府新論」、読書抄録「宏齋抄誌」などがある。ただし、この中には梓に乗らない稿本も多い。「平尾魯仙歌集」も人に求められて草した117首の草稿で彼の和歌の傾向を示している。歌の中では国学の思想を表わして儒学(怪力乱神を語らぬ)を批判し神の存在を詠うものがかなり見られる。万葉的古調よりは、古今集的理知を基調とした叙景歌が多い。大略を言えば明治の旧派に支配的な歌調といえよう。

#### 例歌三首

抜ばやと思ふともいかでぬき得べきわがしきしまの国の三柱  
立帰り又も春にぞなりにけりいざ見ぞめせんやまとみふみを  
玉幸ふ神しなければいかで苛き吹雪を凌ぎあへめや